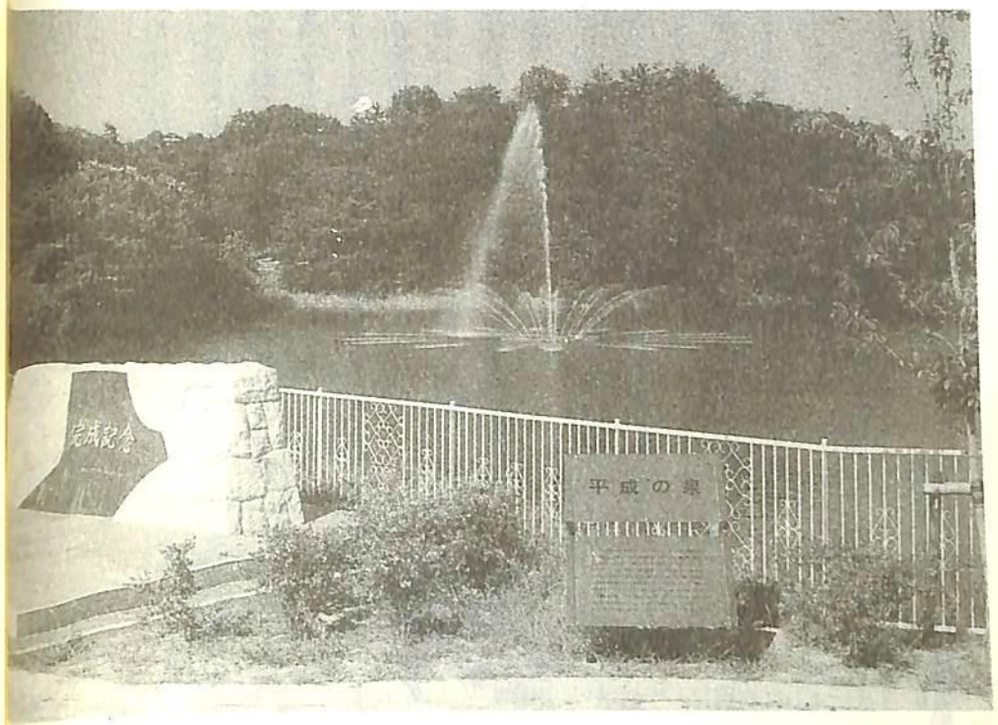
二、校長通信

上地八景



8　大谷公園

全長120メートルの大谷橋が昭和60年に池を二分して建造された。公園北側の山中には、平安時代のあな窯跡も残っている。また、区画整理記念事業による「平成の泉」から吹き上げる噴水が新生上地の勢いを象徴している。

一、笑顔でスタート新学期

●その一、「握手大作戦」

緊張して入学した一年生も、すっかりなれました。顔つきもいっそう明るくなり、動きも、声も大きくなりました。

朝、校門前の「おはよう」リレーも、元気よく言えるようになりました。

一年生の初めの勉強は「学校探険」です。校舎の中を探険して、施設や、学校で働く人の様子を知るのです。

そして、同時に「握手大作戦」ということもします。これは、何人かの先生に会って、自己紹介をし、先生の名前や仕事を質問します。そして、握手やサインをしてもらうのです。

どこに、どんな人がいて、何をしていたか、発見したことを「見つけカード」に書きます。

「しつれいします。」「どうぞ。何の用ですか。」「あのうー。ぼくは一年一くみのさとうよしまさです。あくしゅと、サインをおねがいします。」

みんな、教室で何回も練習してきました。真剣な表情です。

「上手に言えたね。学校楽しいですか。」「うん。」「朝ごはん食べてきたかね。」「たべたよ。」「そうよかったね。」さあ、手を出して。はい握手。」

ここで、みんなにこっと笑います。どの手も柔らかく、そして温かく湿っています。

「あしたも元気よく学校へこようね。大きな声でおはようございますって言えるね。」「はい。」という声が返ってきます。

「どうもありがとうございました。」

この言葉は、ちゃんと言える子もいますが、忘れてしまって、サインを見ながら、にこにこして帰っていく子もいます。

二、三人の子があわてて戻ってきました。
「えんちょうせんせいの、おしごとはなんですか。あ、こうちょうせんせいだった。」
だいじなことを聞くこと忘れていたようです。
「あのねえ、みんなの世話をすることだよ。わかるかな?」
帰りがけに（たったそれだけか。）というつぶやきが聞こえ、思わずにが笑いをしてしまいました。

●その二、「にこにこ写真コンクール」

毎年四月には学級写真を撮ります。一生残るので、一番いい顔をして撮りたいのが人情ですね。一番いい顔とは、もちろん、笑顔です。

そこで、今年は「学級写真コンクール」をすることにしました。一番笑顔のいいクラスに賞状を出すことにしました。

学級によっては、ぜひ賞状をもらいたいという意欲満々で、教室で「わっははは。」と笑う練習もしたようです。

「さあ撮るよ。」「せーのー、ラッキー。」「はい、パチリ。」というわけです。

結果、二十七学級、どのクラスもにこにこして、さわやかな笑顔が写りました。一位入賞のクラスを紹介します。

一年一組、二年四組、三年四組、四年二組、五年五組、六年三組

五年で一位、五年五組の学級代表、野本真行君と大場采央さんにインタビューしました。

「おめでとう。入賞をいつ知りましたか。」

「朝、先生が言ってくれました。」

「みんなの反応はどうでしたか。」

「わー、といってとても喜びました。」

「男子で一番いい笑顔はだれですか。」

「熊谷君です。いつもおもしろい子です。」

「女子では。」

「句坂明子さんです。とても明るい子です。」

「名前も明子ですね。」

「撮った時は何ともなかったけど、写真ができてきて見たら、笑って撮ってよかったなあと思いました。」（野本）

「まじめな顔で撮るより、笑っていた方が楽しいです。」（大場）

六年三組も、学級代表の佐伯康文君と成瀬顕代さんに聞きました。

「どうして撮ったか覚えていますか。」

「先生が、一たす一は?」といって、みんなが「二イー。」と言いました。

「よく笑っているのはだれですか。」

「尾上浩一君、女子は丹下聡美さんです。」

「去年は何も一位がなくて、こんど初めて賞状がもらえるので、先生も、みんなもびっくりしています。」

「まじめもいいけど、笑った方がおもしろい。」（野本）

「一生残るから、笑って撮ってよかったと思います。」（成瀬）

二、本はともだち

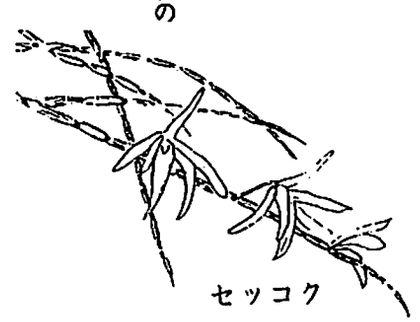
「ともだち百人できるかな」という歌がありますが、本もすばらしい友だちです。

今、学校では、子供たちが、本と友だちになるよう、がんばっています。（小学校時代に読書の楽しみを知っておかないと大人になってからでは、もう、手遅れです。）

まず、日記の中から、本と友だちになっているようすを、見てみましょう。

★きょう、『おねえちゃんてずるいよ』という本をよみました。いもうとが一年生、おねえちゃんが四年生です。トマトジュースがきらいなおねえちゃんは、いもうとにたくさんあげて、じぶんは、お母さんが見てないうちに、コップをぐるぐるまわしてよごすんだよ。だから、お母さんには、ばれない。いもうとのあやは、お母さんにいいつけても、お母さんは、しんじてくれない。うちのおねえちゃんは、そういうではなくてよかったとおもいます。（三の一　植村優子）

★私はゴールデンウィークは、とくにどこにも行きませんでした。自分で勉強したり、本を読んだりして過ごしました。私は本が大好きなので、特に大型連休になると、本が読みたくなります。宿題があると読めませんが、土曜日は宿題がないので、じっくり本が読めます。だから、市の図書館やブックランド（学校の図書室）などに行って、本を借ります。本を借りてきても、すぐ読んでしまって、次の本で、もっとちがう世界に入りたくなります。（六の四　斉藤照代）



セッコク

本の中では、昔の国へ行くこともできるし、未来の国の探険もできます。また、外国へ旅をしたり、夢の国で生活したり、自由自在ですね。

今度は、五年四組の教室（学級通信）をのぞいてみましょう。

★『まんが日本史年表』を読んで。江戸時代のときの日本人は、蒸気機関車の模型や電信機を外国の人にプレゼントしてもらい、すごくおどろいていたので、むかしは、そんなものはなかったのだなあと思った。（五の四　竹井　聖子）

★『太平記』を読んで。楠木正成という人は、すごく頭がいいなあと思いました。少ない兵の中でも、大軍を追いはらってしまう人だから、千人に一人ぐらいしかいないなと思った。（五の四　安田　晃）

★『ぼくは王様』を読んで。王様が城をぬけ出して、うそをしまえる宝石ばこをすててしまおうと、城や町の人の大うそをつくことがおもしろい。（五の四　大滝真司）

★『星の王子さま』を読んで。ぼっちゃんが「ひつじをかいて」とたのみ、三つかいて気にいらなかった。そして四っつめではこのなかに入っているひつじが気にいったから、すごくうれしかったような気がする。（五の四　大林香央里）

学校では月に二ー三回、全校で「読書タイム」を実施しています。先生が読み聞かせをしたり、自由読書、本の紹介、感想画などいろいろ活動しています。

一年生では「おばけの一日」「はらぺこあおむし」「くまの子ウーフのかいすいよく」「十四ひきのピクニック」などの本

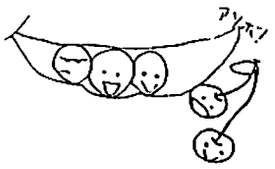
の読み聞かせをしました。あとから、おもしろかった場面を絵にかきました。感想を無理に聞くより、絵に描かせる方がいいようです。

以下、各学年でとりあげた本を紹介します。

・二年生「ガツーンとぶつかるはなし」「ろくべえまってよ」「スイミー」「おならばんざい」「かえるちゃんのおねしょ」「だましっこ」など
・三年生「くまの子ウーフ」「ぼくの地しん日記」「ねずみのすもう」など
・四年生「セロひきのゴーシュ」「ライト兄弟」「さだおばさん」「山ねこおことわり」など
・五年生「ひばりの矢」「じゃめうまはなじろう」「よだかの星」「ひろしまのピカ」など
・六年生「ああ無情」ほか。各自本を読んで感想やあらすじを紹介しあう。

終わりに、上地小学校の先生に、勧める本を聞きました。

・A先生「自分が子供の時に『まんが日本の歴史』を読んで、社会科が好きになりました。」
・B先生「弱虫を勇気づける『十五少年漂流記』こんな冒険旅行をぜひやってみたい。」
・C先生「どの学年の子にも感動を与えて、思いやりの心が育つ本『さっちゃんのまほうの手』」
・D先生「寺村輝夫の王様シリーズがおもしろい。王様の子供っぽさと、ユーモア性が好き。特に『王様ばんざい』がいい。」
・F先生「『アルプスの少女ハイジ』いつの時代でも、このようにけなげなハイジはとてもいい。」



生の愛

4田3岡

三、委員長さんに聞く ―― はりきる委員会活動 ――

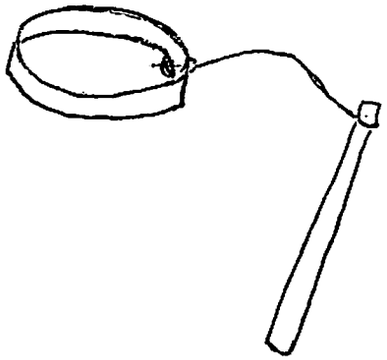
今月は、児童会の委員会活動についてご紹介します。

まず、六年生の生活記録を紹介しましょう。

「私は放送委員会を第一希望に入れましたが、何かとあれこれで、地味な美化委員会に決まりました。私は美化はあまりおもしろそうじゃない、地味という理由で第八希望でした。が、今は美化委員会のしごとがとてもとても楽しいです。とても楽しいです。特にもうすぐ、私の出したパズルでの「そうじコンクール」がおこなわれるので、とてもうれしいし、月曜日が待ち遠しい気分です。あまり気の進まないことでも、やってみれば楽しいことも大ありですね。だから、これからいろいろなことにちょう戦し責任をもって何でも成しとげたいと思います。（六の四古沢寛子）

与えられた仕事に、まじめに取り組んでいこうとする気持ちが尊いと思います。

六月十五日（月）は「雨雨集会」でした。これはなかよし集会委員会によって企画しました。題名も内容も子供らしい発想です。その中で、「紙のけん玉」をつくって遊ぼう、というアイデアが出されました。委員の子が、授業後残って準備をします。画用紙を切って輪をつくります。これがなんと九六〇（児童数）も。当日は一人ひとり持ってきた割り箸に、糸をつけてできあがりです。（図参照）一年生から六年生まで、「きゃっきゃっ」と大喜びです。



渡部　俊介

「体を使ってやる集会が少なかったので、今まで以上に一年生も喜んでくれてよかった。」
と委員の子たちも満足顔です。
委員長の渡部俊介君（六の一）に聞きました。
「委員会活動をしていて、楽しいことや、困ったりすることは？」
「集会が成功して、みんなが喜んでくれるとき。困ることは、時々さぼる人がいる。でも、次の日、あやまるけど。」
以下各委員長さんにも聞いてみました。（敬称略）
・ドレミファ集会委員長（六の四　堂園　秀樹）
「自分のアイデアが集会に使われることがうれしい。集会の時など、ずっと笑っていたり、入退場が遅いのが困ります。」
・美化委員長（六の二　富永　健太）
「そうじ道具入れの中が、きちんとせいとんされているとうれしい。先生が話している途中、しゃべっている人がいるのが困ります。」
・安全委員長（六の一　井口亜希子）
「名札をつけよう運動を始め、みんながすぐ実行してくれるとうれしいです。あぶないことをしていて、注意してもなかなか聞いてくれないのが困ります。」
・赤十字委員長（六の三　中塚　健史）
「ベルマーク集めをすると、いろいろな品物が買えてうれしいです。でも、ベルマークで買ったもの、たとえばホッピングはすぐこわれてしまいます。どうすれば大切に使ってくれるでしょうか。」

・新聞委員長（六の二　柳瀬　志穂）
「新聞をみんなが読んでくれているのを見るときがうれしいです。新聞にのせることを決めるとき、なかなかきまらないので困ることがあります。」
・図書委員長（六の一　夏目　俊彦）
「いろいろ本のことが、よく分かるのがいいです。本がくしゃくしゃになったり、カードにきちんと書いてないのが困ります。」
・放送委員長（六の三　尾上　浩一）
「自分たちで放送を流すことがとても楽しい。でも、もっとよく放送を聞いてほしいです。」
・緑化委員長（六の四　杉浦　詩帆）
「自分たちが水をやった花が、きれいに咲いたときうれしいです。でも、夏はすぐかわくので水やりがたいへんです。」
・保健委員長（六の一　上坂　亜希子）
「あまり自立たないところで仕事ができることがいい。せっけんや消毒液を遊びで使ってしまう子がいるので困ります。」
・運動委員長（六の二　大滝　幸司）
「大会などひらいて、成功したときうれしい。使った竹馬などが、ばらばらになっているので困ります。」
・給食委員長（六の二　森下　康志）
「先生やみんなとしゃべれるのがいい。委員会のとき、なかなか静かにしてくれないのが困ります。」
・ＶＴＲ委員会（六の一　住田　朋久）
「ビデオをつくるとき、いろいろな機械のことが覚えられることがいい。でも、機械を使おうと思っても、こわれて使え

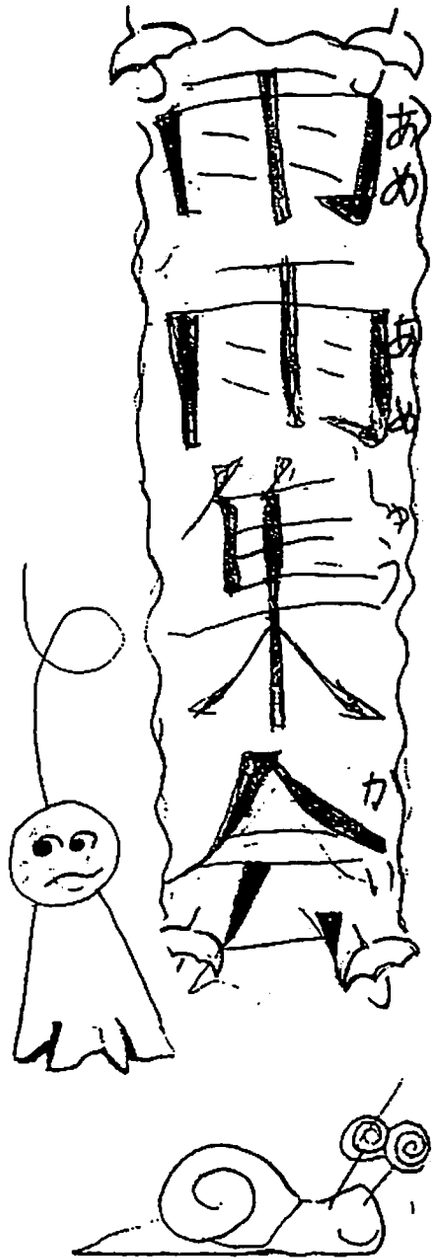
なかったりすると困ります。

・広報委員長（六の一　松田　剛幸）

「イラストコンクールなどで、いろいろな絵が見られるのでいいです。掲示物が取れたり、傷つけられたりしてあるのがしずつなれてきてよかったです。運動委員会とソフト部と代表委員会とやっていて忙しいけど、困ることはありません。」

・代表委員会（大滝　幸司）

「委員会で選手激励会や上地っ子文化祭の相談をしています。うまく話すことが苦手だったけど、やっているうちに、少



雨雨集会のチラシより

四、みんな大好きクラブの時間

七月四日（水）のクラブ活動をご紹介します。

サンクガーデンでは、野外レククラブ（部長六の四堀岡健太）が「火舞い」の練習をしていました。「きょうは本物の火をつけてやるんだよ。」と興奮気味です。「ドキドキしたけど、すんだらスッキリしたよ。やっぱり火をつけてやると楽しい。」八月二十四日の夏祭りに出演がきまって、練習にも一段と熱が入ります。

書道クラブ（部長六の四福井己容）を見ました。一人ひとり、先生に直してもらって、じっくりと練習しています。「みんなちゃんとやるので、別に困ることはありません。いま防火展の作品を書いています。」床に正座して、大作を書いている子もいます。

パチリパチリ、将棋のコマの快い音。教室のあちこちに陣取って、楽しそうにやっているのは将棋クラブ（部長六の四小川隆史）です。「リーグ戦をやるのが楽しい。みんながもっと強くなってほしい。」とは部長さんの意見です。

５の１　名兒那良美

（原画　平沢多映子）

編み物クラブ（部長六の四中垣まどか）は、が女子ばかり。「ポシェットやクッションなど作ります。毛糸で編むことが楽しい。」指先を動かした分だけ、でき上がっていくのが目に見えるので、張り合いがありますね。

体育館では卓球クラブ（部長六の四吉本玄）が、名人戦をやっていました。この日の名人は、六年尾上浩一君。「総当たり戦を四年から六年まで、みんなでやってみたい。」と部長さんもはりきっています。

バトミントンクラブ（部長六の一平野扶美）も体育館です。「今は打ち合いの練習です。みんながもっとうまくなって、一対一で試合をやってみたい。」小田先生や部員の熱意で、バトミントン部になる可能性もあります。

今度は手芸クラブ（部長六の四田上峰子）です。「フェルトを使って人形やブックカバーなどを作っています。みんなでやるのでとても楽しいです。いろいろ役に立つものを作りたい。」いろいろな作り方をおぼえるので、これからが楽しみです。

紙ひもクラブ（部長六の三本田智久）は、はさみやカッターナイフで手先の仕事です。船、飛行機など自分の好きなものを作ります。中にはヘリコプターを工夫して作る子もいます。「細かい作業がうまくできないことがあります。それができた時が一番楽しい。」という部長さんの感想です。紙ひもとは思えない、味のある模型ができます。

クラフトクラブ（部長六の二深水祐介）は図工室で、ステンドグラスの小物入れ製作中でした。先回までは模型飛行機を作って、飛ばしていました。工作の好きな子には、最も待ち遠しい時間のようです。

科学クラブ（部長六の四畔柳佳代）は理科室です。にぎやかな音が聞こえます。ストローを切って、笛を作り、ピーピー鳴らしています。切り方を考えては、音を変える工夫をするのが、科学クラブらしいところです。

社会科クラブ（部長六の四鈴木由香里）は視聴覚室です。この日は四台のテレビで、地域教材の自作ビデオ「三河仏壇」を見て感想を話し合っていました。授業に直結しているクラブです。「地名あてクイズがとくに楽しい。」そうです。

レクレーションクラブ（部長五の三星野友作）は先回はカラオケ大会、きょうはプールで水中ボール遊びで、大はしゃぎです。「プールでの遊びが今までで一番楽しい。」そうです。

ソフトクラブ（部長六の一阿部田直樹）は男子に人気のあるクラブです。「外で思いっきりソフトをして遊ぶのが楽しい。みんなの集まりが遅いと困るけど。」部長さんは責任がありますから、集まり方も気にしますね。

ホームクラブ（部長六の一塚本晶子）は女子のクラブです。「ビーズで小物作り、フェルトでふでいれを作りました。ペーパーフラワーが一番楽しい。料理にも挑戦してみたいです。」とやる気まんまんです。

スケッチクラブ（部長六の一宮崎純）「クロッキーや風景、動物などかいています。大きい紙に思いっきりかきたい。」教室に、ゆったりと温かい空気が流れます。未来のピカソを夢見ているのでしょうか。

読書クラブ（部長六の一藪本真吾）は広い図書室です。本好きな子は大ぜいいます。本に囲まれて、静かに読んでいます。「いろいろ好きな本がいっぱいあって、たくさん読めるからいい。読書カードも書きます。」

園芸クラブ（部長六の四加藤恵一）は花壇で活動します。「水まき、草取りなどしています。植物を育てることは楽しいです。」これこそ好きな子でないと続きませんね。育てる楽しみや苦労は、貴重な、すばらしい体験となります。

五、結果はあとからついてくる

―夏休みを終えて

スポーツ大会を前にして、選手の子に言うことは、このように決まっています。

「どのチームよりも、大きな声で挨拶をしよう」「どのチームよりも、いいマナーで行動しよう」「相手のチームよりも早く並ぼう」

上地小の子供たちは、今年も精いっぱい、自分の力を出し切って活躍してくれました。力いっぱいやれば、結果はあとからついてくるものです。結果は次の通りです。

・バレーボール（九人制）男子優勝／女子準優勝　バレー県、東海大会（六人制）女子優勝／男子準優勝・バスケット準優勝・サッカー三位・水泳男子総合五位・ソフトボール　ベスト8

競技を見た、よその人が「上地の子は表情が明るいねえ」「声が大きい。活気がある」と感想をもらしていました。本当にそうだと思います。

特別に選ばれた子供ではありません。特別に体の大きい子供でもありません。ごく普通の子が、汗と涙の練習を乗り越えて、こういう成果をとってくれたのです。本人の努力はもちろんですが、指導者の方針にご協力くださった保護者の方のお陰でもあります。厚くお礼申し上げます。

ところで、このごろは学校でも、家庭でも「子供を鍛える」ということがむつかしくなりました。「辛抱する」「歯を食いしばってもやり遂げる」「みんなのために、自分のことを忘れる」ということを知らないと、長い人生で挫折することがあります。こういう強い心を養う機会が、少ないのですが、スポーツならできます。勝ち負けより、ここで強い心身が育ってくれることを願っております。

一方、室内でも静かな苦闘が続いていました。それは、熱さとの戦い、汗だくの根気くらべの「統計グラフづくり」です。テーマをきめる、内容を検討する、資料を集める、アンケート項目を考える、アンケートをとる、集計する、まとめる、下絵をかく、色をつける、拡大する、規定の用紙にかく、最後にいよいよ色ぬり。これがまた、ミリの単位のグラフで神経を使うこと甚だしいのです。こうしてやっとでき上がりという順序です。

このあいだ、いくつかの壁があります。先生や保護者に何度も相談します。やりなおしをしたり失敗したりで、べそをかいたり、励まされたり、途中で投げ出したくなりますが、それをやっと我慢してやり遂げます。これも「市長賞」「教育委員会賞」「算数数学部会賞」そして『学校賞』をいただき、さらに十七点も入賞しました。

四年連続出場のバレーボール全国大会は、「よくここまでやってくれた」という一語につきます。言葉では言い表せないプレッシャーを見事にはねのけて、上地っ子の底力を発揮して、愛知県代表の使命を果たしてくれました。目には見えませんが「上地」というふるさと意識を、一段と高めてくれたことも忘れることはできません。全校の子に「やればできる」という勇気と自信を与えてくれました。物心両面から、絶大なご援助を頂きました方々に、深く感謝しております。

総代会、社会教育委員会、ＰＴＡが一体となって第二回の親子夏祭りが行われました。「手作り」の、有意義な夏祭りでした。今年は子供たちも、鼓笛バトンパレードや火舞いなどに大勢出演して、大盛況のうちに終わりました。夏のタベ、親子、家族で楽しんだ思い出は、いつまでも消えることはないと思います。この行事も大勢の方々から絶大なご協力をいただき、重ねて厚くお礼申し上げます。

六、生命の尊さを知った授業

九月十九日、五年五組（担任小田英宣先生）で、保健の研究授業を行いましたので、ご紹介します。内容は、「からだの発育」で、性教育の基礎となる大事なところでした。子供たちの素直でまじめな学習ぶりを知っていただきたいと思います。

学習の進めかたは次のようでした。

一、自分が産まれた時の様子や苦労話などを発表する。（前の時間までに「自分が生まれたとき」という題で作文ができている。）

二、赤ちゃんになる卵（受精卵）の大きさを予想して、図にかく。

三、おなかの中で、赤ちゃんがどのように大きくなっていくのか考えて発表する。

四、ビデオ「受精卵から出産まで」を視聴する。

五、「お母さんの話」（録音）を聞く。

六、不思議に思ったことや、驚いたことを書く。

体の仕組みの理解だけでは、、片手落ちになってしまいます。ご両親の子供が産まれるときの、喜び、期待、苦労などを知り、感動的な授業になりました。

次の、お母さんの話は、、事前に家庭で録音してもらいました。

・お母さんのおなかにいる時から、あなたは女の子とわかっていました。だから、産まれる前から、あなたの名前は、Yときめていました。末広がりで、大きな大きな枝となって、しっかり生きてほしいからです。小さな体なのに、

大きな声で泣いたとき、思わず「神様、有難うございました。」と、手を合わせました。三番目だけど、あなたの顔、、あなたの体、あなたの手、みな覚えています。三月一日、窓の外は雪が降っていて寒い日だったけど、お母さんの心は暖かかったよ。もみじのような手で、あやとりをしたり、折り紙を折ったり、一生懸命やっていたあなたの目は輝いていたよ。これからも元気で、やさしい女性に成長するように、家族で祈っています。

授業を受けた子供の感想文を、抜き書きしてみます。

●私は、今日の授業を受けたとき、どういうことをやるのかなあ、と思っていました。ただ、赤ちゃんのことだけはわかっていました。私は初め、ドキドキしました。一年生も三年生も（研究授業を）やったので、がんばろうと思いました。先生がカセットテープを流すとき、だれかなあと思っていたら、（私の）お母さんでした。私は、思わずびっくりしてしまいました。。ほんとうにお母さんの気持ちがわかって、少し泣いてしまいました。お母さん、私を赤ちゃんから育ててくれて、ありがとう。（I・Y）

●わずか十か月で母のおなか、まほうの部屋で五十センチもおおきくなって、今までぶじに育ってきました。最初、わたしは赤ちゃんを産む時、、すごく痛いよと母に聞かされて、大きくなっても赤ちゃんは産みたくないと思ってきたけど、この授業を受けたら、自分で一つの生命を育てるなんてすごいなあ、と思いました。自分が女でよかったとも思うようになりました。これから大きくなって、赤ちゃんを産む時があっても、このことは忘れないと思います。そして、母や父たちが、私をかわいがってくれたのと同じくらい、それ以上に、自分の赤ちゃんが産まれたとき、かわいがってあげようと思います。（B・S）

●ここまで大きくなったのは、お母さんのおなかの中で、まほうをかけられたみたいに感じました。だからぼくは、お母さんにあらためて感謝しています。こんなにかわいがる人もいれば、赤ちゃんをすててしまう人もいます。ぼくはそうい

う人たちのことが信じられません。もっと人の命をだいじにしてほしいと思います。（N・M）

●ぼくはこの授業を受けて、生命の誕生はとてもすばらしく、そして少しふしぎだ、と思った。産まれる前は、お母さんのおなかの中で、ほんの0．5ミリほどの卵から、今は約百四十センチもある子が産まれてきたなんて、本当にすばらしい。お母さんたちの勇気、愛情には、ぼくが何百人集まっても勝てやしない。すごいなあ。だってひとつの生命を産みだすんだもん。お母さん、どう表現したらいいかわからないけど大感謝！ありがとう。ほんとうにどうもありがとう。

（K・H）

どの子も生命の神秘と尊さに驚き、母への感謝の気持ちを強くしていることが分かります。こういう学習をしておれば、難しい第二反抗期もうまく乗り越え、立派に成長してくれることと思います。

七、本を読む楽しみを

「秋の夕日に　照る山もみじ・・・」の歌が、あちこちの教室から聞こえてきます。

昔から言われるように、秋は読書にいい季節です。六月には「あじさい読書運動」を実施して、ほんの好きな子供がたくさんふえました。

秋には「もみじ読書運動」によって、もっともっと好きな子供を増やしたいと思います。

ところで、体の栄養をとることを忘れる人はありませんが、心の栄養をとることをわすれることがあります。心の栄養のとりかたは、いろいろありますが、読書が最も良い方法であることは、よくご承知のことと思います。

そこで、学校では、十月三十一日から十一月二十六日までを「もみじ読書運動」の期間として、目標を決めて、本を読むようにします。

・一、二年　　二十冊以上
・三、四年　　十冊以上
・五、六年　　千ページ以上

多いなあ、と思われるかも知れませんが、一、二年生の本は、絵が多く、字も大きいので、五分か十分もあれば、一冊呼んでしまいます。また、厚い本でも薄い本でも一冊は一冊ですから、どの学年も冊数はそんなに負担にならないでしょう。

本によく「〇年生向き」と書いてありますが、これにあまりこだわることはありません。

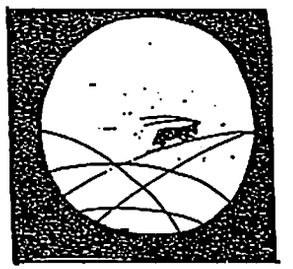
その子の興味、経験に応じて、この枠は無視していいのです。その子の個性で、例えば、六年生が三年生の本を読んだっていいのです。

「テレビなら大好きですが、本を読むことが嫌いで・・・。」とか「マンガばかり読んでいて困ります。」とかよく耳にします。これは、まだ本を読む楽しみ、本のおもしろさがわかっていないからです。読書の楽しさ、おもしろさを知らせるために、このような読書運動を進めるのです。

もうひとつ、「親子ふれあい読書」（家庭読書）のご協力をお願いします。カードを用意しますので、うちの人といっしょに読んだら、ひとつ色をぬります。都合で読めない時は、家で二十分以上読んでも色がぬれます。親子話し合い、ふれあいよい思い出となりますのでぜひ、実行してくださるようお願いします。

いずれにしても、本を好きにさせるには、環境が大事です。家の人が読めば、子供は自然に本好きになります。（スポーツや趣味の例でもよくわかります。）また、「興味と必要」があれば、読むなといっても読むものです。

小中学校時代に、読書の楽しみを知っておけば一生読む習慣がつくのです。



八、学区・学校創立十周年記念事業によせて

十周年事業について、私は子供たちに、次のように話します。

「家庭で子供の誕生祝いをします。両親や家族の願いがこめられ、子供はその期待にこたえようと思います。そして、今までのあゆみを振り返り、これからの希望を話しあうのです。学区・学校の誕生祝いが十周年の事業です。学区の人が、みんなでお祝いをするおめでたい行事です。これは毎年やることはできないので、十年に一回やります。」

おかげで、十周年記念事業も、順調に進んできております。「記念誌」「「郷土読本」の編集も始まっています。「ふれあい牧場」も、りっぱに改築されつつあります。

学校正門横には、記念像の土台もできましたので、このことを少し説明します。

記念像などは、どこか学区のまん中に作ったほうがよいという意見もあります。しかし、「小学校を学区の中心にしたい」「公園などだと、傷つけられたりいたずらされたりする心配もあるし管理もむつかしい」「小学校以外に、適当な場所もない」という理由で、委員のかたのご賛同を得て、学校に設置させていただくことになりました。

記念像は、十周年記念にふさわしい条件として、次のようなことが考えられます。

・発展する郷土上地、住みよい町上地を象徴するもの
・子供、学区民の心のよりどころとなるもの
・どこに出しても恥ずかしくないもの
・押し付けがましくなく、親しみ易くて芸術性の高いもの

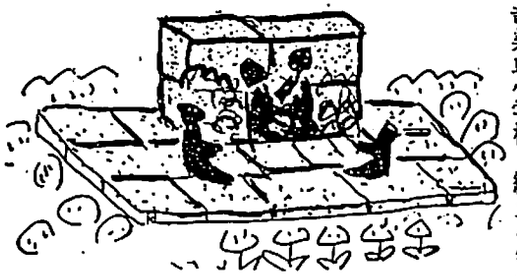
具体的には実行委員長の成瀬司氏、記念施設部長鈴木行夫氏や部員の方を中心に検討していただき、岡崎の特産みかげ石で、定評と実績のある郷土の彫刻家、鈴木政夫先生にお願いすることになりました。鈴木先生は、学区を歩かれ、上地の風土を肌で感じられ、半年間構想を練って、作品（レリーフと人物像）を『ふるさと上地』と命名、鋭意制作中であります。

☆鈴木政夫先生の最近の動静を紹介します。（十月四日、「岩手日報」より転載）

「心の師、光太郎ゆかりの花巻訪問／四十数年ぶり報恩の像　愛知の鈴木政夫さん」

高村光太郎を生涯の師と仰ぐ岡崎市在住の彫刻家鈴木政夫さん（七十五）が、十月八日、光太郎が戦後疎開していた花巻市を訪れ、自作の石彫を寄贈した。鈴木さんは、石の彫刻家としては日本の第一人者で、全国各地の公園に作品が展示されている。花巻へは弟子を志願して疎開先を訪ねて以来、四十数年ぶりの訪問。「光太郎に励まされ、光太郎を思い続けてきた私にとっては花巻は私の彫刻の出発点」と長年の思いがかない、感激の面持ちだった。

（鈴木政夫先生は、関西阪急ニュータウンの環境造形を担当。太陽の城、城北中学校、葵中学校、竜美丘小学校、緑丘小学校などに記念像が設置されています。）



九、かみかみ運動・けがの功名

▼「かみかみ運動」

食事のとき「よくかんでたべましょう。」ということは、だれでも知っています。よくかむと、いいことがたくさんあります。

・歯が丈夫になる。
・消化を助ける。
・食べ過ぎしなくなる。
・歯並びがよくなる。
・あごが適度に発達する。
・血液の循環がよくなる。
・骨が丈夫になる。

ところが、このごろの食事は、あまりかまなくてもいいようにできています。成長の止まった大人ならまだしも、育ち盛りの子供にとって、これは大問題です。

学校では、給食に「干しいわし」とか、「干しいか」などが時々出て、かみかみ運動を奨励しています。しかし、これだけでは、とても追い付きません。家庭の方でも、めんどうがらずに、家中でかみかみ運動をしていただきたいと思います。

ところで、最近「若い人のかむ力が衰えたから、近眼がふえた。」という説を聞きました。よくかむと、目の横の筋肉を刺激して、視神経が発達する。近視は、テレビの見過ぎや本の読み過ぎなどではなくて、「よくかまないから視神経の発達が悪い」というのです。

それはともかく、あごの発達が悪いと、頭の重心が不安定になります。大人で「頭の重さは体重の七％」といいます。子供では体重の一〇％ぐらいでしょうか。そうすると、四〇キログラムの子供は、四キログラムの頭を支えて、走ったり飛んだり

しているわけです。それにあごの発達が遅れ、頭の重心が不安定になっていると、よく転びます。その上、骨が弱くなっているのですから、骨折をしやすいということになります。

学校のけがは、打撲、擦り傷、切り傷、捻挫、骨折といろいろあります。中でも骨がもろくなっていることが、最近著しい傾向です。安全指導に十分気をつけておりますが、年々ふえています。ご家庭でも、あごや骨がもっと丈夫になるよう、ご留意くださるようお願いします。

▼けがの功名

「あんたが、ぼやぼやしているから、けがをしたんだよ。」

「この忙しいのに、お父さんに叱られるよ。」

これでは子供は救われません。小さいときは、話をよく聞き、少しの時間でも一しょに遊び、本を読んでやったりします。少し大きくなると、お母さんは、下の子に手がかかる、お勤めもある、家事も忙しいといったこともあって、つい放任されることもあるようです。

子供が、何かを親に訴えようとしても、じっくり話しかける暇などありません。時には甘えたくても、そんな隙がないのでしょう。こんなとき、子供の生活は、だんだんおかしくなります。いつのまにか、親と子の「こころ」が離れて行きます。

何年か前のことです。A君が骨折をしました。

お母さんは、こんな時ばかりは、忙しいなどと言っておれません。入院したので、A君に毎日ご飯を食べさせる。体を拭く。着替えを手伝う。一しょにゲームをする。こういうことを通して、忘れかけていた「親子の肌の触れ合い」や「対話」ができました。そして、一番だいじな「お母さんと子供が、目を見て話ができる」ようになりました。

骨折をきっかけに、よい親子の関係はよみがえりました。A君は、これを機会に、表情が明るくなり、子供らしさをとりも

どしました。教室でも落ち着いて勉強できるようになったのです。

けがをしたり病気になったりすることは、決して望ましいことではありませんが、今まで「見えなかったもの」が見えてくることもあります。心がけ次第で、マイナスをプラスにすることができます。

まさに「けがの功名」です。

十、学芸会を終えて

今年の学芸会で、一年生が、生活音楽劇「おいも・おいも・おいもかんげいかい」を、力いっぱい上演し、大好評でした。

このサツマイモを作った農園は、学校の南門前にありますが、成瀬俊雄さん（上地町宝六）の畑です。成瀬さんのご厚意で、力いっぱい、楽しい発表もできました。長い間、快くお貸しくださって、どうも有難うございました。

四年三組が「絵からぬけだしたトラとりゅう」を、創作舞踊で発表しました、虎の絵の掛軸は、早川博さん（上地町下屋敷）のお宅にあります。子供たちは、早川さんを訪問して先祖伝来の家宝、虎の絵を見せてもらい、お話を聞き、交流を深めながら、創作舞踊を作りあげました。四年生とは思えないレベルの高い表現に、みんな驚きました。

四年四組の「あほろくの川だいこ」のクライマックスに、太鼓が鳴ります。この太鼓の打ち方は、成瀬忠さん（上地六丁目）が、わざわざ日曜日に来て、手を取って教えてくださいました。お陰で、当日は、しっかり腰の入った構えで、迫力満点の音色が、会場いっぱいに響きわたり、観客の胸を打ちました。

早川さんも、成瀬さんも、子供たちの演技を見て、非常に感激してみえました。

これなど、ひとつの例ですが、事あるたびに、地域の方々にいろいろ親切に教えて頂いて、感謝しています。改めて、お礼申し上げます。

家庭科室では、ＰＴＡ役員さんによるバザーが大盛況でした。前の日の、夕方遅くまで準備していただき、その甲斐あって、大入り満員でした。鈴木豊会長さん初め、宇井均副会長さん、井口清次書記さんなど、男の役員さんまでが、エプロンを付けて、かいがいしく働いておられる姿を見て、感銘を受けました。率先して、みんなのために働いて下さってこういうことが学芸会を一段と盛り立てていたのです。家族で温かいお汁粉を飲みながら、談笑されるのを見て、すばらしい機会ができて、本当によかった、と思いました。

子供たちが、入口のスリッパや下足をそろえておってくれました。寒い風のあたる所です。舞台係、放送係、照明係、会場係、その他多くの係の子供が、このような「縁の下の力持ち」に徹して、自主的によく働いて子供たちが学芸会を成功させてくれました。

あさひ写真屋さんが「お客さんが、いつも多いですねえ。」と感心していましたが、子供たちの熱演につい引き込まれて、大勢の方が笑ったり涙ぐんだりした一日でした。

学校では、読書にも力を入れております。その成果が認められて、今度「学校図書館奨励賞」（岡崎市内で一校）を頂きました。読書の影響もあって、次のような、子供たちの好きな本から脚色された劇がたくさんありました。

「どろぼうがっこう」（かこさとし）、「あほろくの川だいこ」（岸武雄）、「二十四の瞳」（壺井栄）、「走れメロス」（太宰治）など定評ある名作です。そのほか、民話、童話、歴史物などがありますが、この機会に、もう一度原作を読んでほしいと思います。きっと子供たちの心を、いっそう豊かに育ててくれるでしょう。

十一、クラス編成を改善します

本校では、現在クラス編成は次のようになっています。

・一年生は新しいクラス。
・二年生もクラス替えをする。
・三年でクラス替え、三、四年は同じクラス。
・五年でクラス替え、六年は同じクラス。

このように、六年間で四回、クラス替えをするわけですが、これを検討して改善したいと思います。上地小学校の子供の実態、保護者の方の意見、教師の考え、そして時代の動きなどからみて、子供の健全な成長のため、よりよい方法にしたいという願いです。

結論から言いますと、これから「全学年、毎年クラス替えをする。」ということです。

主な理由は五つあります。

一、子供たちは、六年間にできるだけ多くの友達を作るのが望ましい。できるだけ多くの教師に接して学んだほうが、偏りのない成長が期待できる。

最近、児童数が一千人近くなり、一学年の学級数が五クラスにもふえてきて、同じ学年でも知らない教師、子供がいる。したがって、人間関係がうまくいかず、トラブルが起き易い。

二、これからの時代は、個性化がますます進み、教師の方針になじめない子供も増えることが予想される。そういう子供が二年間一緒にいるということは、考えなくてはならない。

三、毎年クラスも替わり、担任も替わるほうが、新鮮な気持ちで学習できる。一年勝負で、学級づくりをするほうが望ましく「来年こそは」ということは、あまり期待できない。

四、二年間固定すると、学級差が大きくなり過ぎ、子供、保護者間に好ましくない競争心が生まれることがある。

五、すでに、多くの学校で、毎年クラス替えしているが、特に問題はない。中学校は全部、毎年替えている。

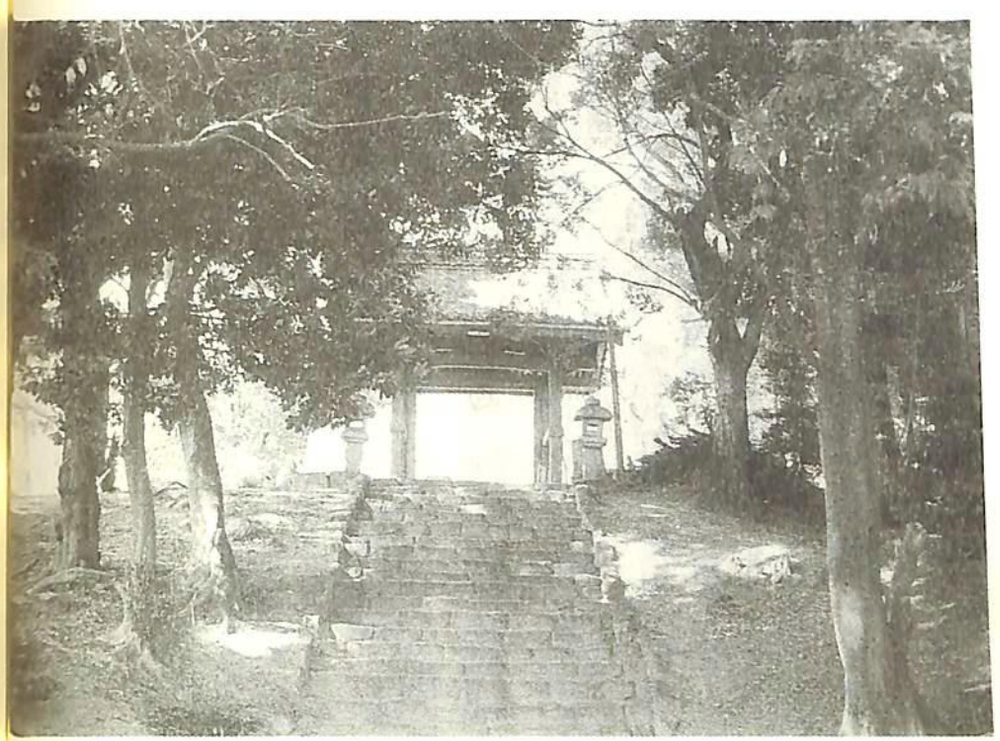
ただ、学級や教師になじむのに、時間がかかる子供も、以前はいました。しかし、現在は入学前から何年も幼稚園、保育園に行って、集団生活になれているので、そういう心配は減ってきています。また、気の合った友達や先生なら、二年間くらい一緒のほうがいいという場合もありますが、毎年替わったほうが、もっと成長できるかも知れません。

以上のような理由によって、新年度からクラス編成をいたします。ご理解くださいまして、ご協力くださいますよう、お願いします。

なお、担任も毎年替わるわけですが、一部の子供は、おなじ先生の「持ち上がり」ということもあります。

三、教室の窓

上地八景



5　百丈山三菩寺

旧国道248号線から山門を目指して階段を上ると、樹齢百年を越すウバメガシの大木が茂る。元禄12年に、当時の上地奉行職早川武左衛門により寄進され、上地を雷の災害から守ったという「長命地蔵」も祭られている。

一、しゅうかい　だいすき　いちねんせい

一年担任　冨田　尚子

入学式の日にお母さんと離れるのがいやで、目を真っ赤にしていたAちゃん。「いえにかえりたい。」とさけんでいたYくん。スタートからこれでは　と、心配していた一年四組のこどもたちも、だんだんと学校生活になれて、とてもにぎやかになってきました。

「おはようございまーす！」

朝、一番に大きな声であいさつをすると、次は大好きな朝の歌です。

> ♪　あさ　おきたん　ひがさしたん　ばじゃまぬいじゃったん
> あさ　おきたんたん　ひがさしたんたん　ばじゃまぬいじゃったーんたん

「あさ　おきたん」の歌の歌詞に合わせて、楽しいふりをつけると、大騒ぎです。席ではあきたらずにいすの上に乗って踊り出す子もいます。

「大きな口をあけて歌うと、いい声が出るよ。」

と呼びかけると、顔じゅうが口になったようにせいいっぱい目も口もひらいて、一生懸命に歌っています。こんなふうに、一年生の一日は始まります。

楽しい歌を通して、一年生はこれまでに「なかよししゅうかい」「お花見しゅうかい」「うたごえしゅうかい」を行ってきました。

ともだちのかお　（たけうち　えみ）

びっかびっかの　いちねんせい！　ジャン（ポーズ）
ファイトー　うえじっこ！

このかけ声が一年生集会の始まる合図です。「ジャン」のポーズはかっこいい形を自由に考えてやるのですが、次第にいろいろな動きをくふうするようになってきました。

次はゲームです。体育館いっぱいに広がって遊ぶうちに、友達の輪も大きくなってきます。なかでも子どもたちが大好きなのは、「おちたおちた」というゲームです。落ちてくるものによって反応が変化し、見ている先生も楽しんでしまいます。

♪　おちた　おちた　なにがおちた
カミナリ！（まんじゅう　おかね　てんじょう　などなど）

知らない子とも一緒に歌を歌ったりゲームをしたりするうちに、いつのまにか話すことができるようになります。楽しいふんいきに慣れたところで、ともだちの絵をかいたり、校歌を歌ったりしました。

とくに「うたごえしゅうかい」では数十分の練習で一番の歌詞を覚えてしまい、子どもたちの吸収力に驚かされました。

歌ったり、リズムにあわせて体を動かすことが大好きな子どもたちです。これからも歌やダンス、ゲームを取り入れて、楽しい集会を行い、学校大好きな一年生になってほしいと思います。

ともだち

（いないし　こうすけ）

（うえはら　あい）

二、みんな輝いてるね

春の遠足

二年　担任　深津　伸夫

五月十三日、前夜の雨がまるで嘘のような晴天になりました。

「先生、きのうね、てるてるぼうずをつくったんだよ。」「わたしもつくったよ。」

リュックサックと水筒を持った子供たちの声が元気よく私に襲いかかってきました。二年生は、いつでも活発に動き回ってますが、遠足の日の朝はそれにもまして、みんな興奮気味でした。

学校を出発するころから、子供たちの瞳がより一層輝き始めました。とにかく、美合農業大学校へ行くまでの間、まっすぐ前を見て歩いてはくれません。歩道の片隅に小さな花が咲いていれば、大騒ぎをしながら花を摘み、ジュースの自動販売機を一人の子が触れると、みんな同じように次から次へとさわりながら歩いていきます。水田におたまじゃくしを見つけければ、大はしゃぎをしながら石を投げつけていきます。

私も初めての遠足の引率ということで、

「前を向いて歩きなさい。遅れないようにさっさと歩きなさい。」

とはりきって声をあげていたのですが、好奇心のかたまりのような子供たちの耳まではなかなか届かないようでした。

農業大学校では、小山のように大きな牛、愛敬いっぱいの豚を目の前にして、

「梅干しみたいな変なにおいがする。」

と顔をしかめ、鼻にハンカチをあてながらも、牛に草をやってみたり、濡れた鼻を触ってみたりと、瞳を輝かし続けていました。

うしは、大きかったです。にくにされちゃううしもいるんだな。かわいそうだなあ。うしの赤ちゃんはかくしてあるから、うしの赤ちゃんはだいじょうぶだなあ。ほんとうによかったなあ。

（小島　よしたか）

お弁当も、緑いっぱいの広場や、木の下などで各クラスごとに食べました。照りつける日差しを受け、草の匂いのする中で食べる弁当は格別でした。

あんなでっかいうしは、生まれてはじめてみたよ。草の上があったかかったのか、うしがねてたんだよ。先生といっしょにあそべたし、おべんとうもいっしょにたべれたから、それし、ともだちとおかしをわけあって、とってもおもしろかったし、よかったよ。

（戸松　ちえみ）

お弁当がすむと、今度は遊びです。木の陰を使ってのかくれんぼ、しろつめくさの首飾り、クラス全員でのゲームなど最後まで子供たちの瞳は曇ることなく輝き続けました。たった一日の遠足でしたが、子供たちは大地という広大な教室の中で、牛や豚に学び、緑に学び、風に学び、仲間と共に学び合うことができ、そして全身で大自然の大きさ、暖かさを楽しみながら感じ取ることができたと思います。この遠足での貴重な体験を、これからの生活に生かしていってほしい。子供たちの瞳が眩しいくらい輝きを増し、活気あふれる二年生になっていってほしいと思います。

戸村　まゆみ

三、先生、大変だよ

三年　担任　杉本　峰

「先生、先生、あのねー、大変だよ。」

朝一番で数人の子が職員室にとびこんできました。何事かと不安がよぎります。

「ちょっと待って。まず、おはようございます、ね。」

「おはようございます。あのね、アゲハがさなぎから出てきとるよ。」

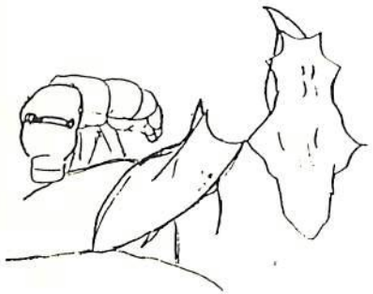
「すごいじゃん。さなぎになってから長かったもんね。」

「みんなに、そっと見るようにいってあげてね。」

不安も吹き飛び、思わず頬がゆるんできます。朝から病人かけが人が出たか、大げんかでも始まったかと、つい悪い方に考えてしまいます。でも、こんな「大変」なら大歓迎。その日は、一日中、いつアゲハを外へ逃がしてやるのか、みんなが気にかけていました。

三年生では、理科で『こん虫の育ち方』を学習しています。そこで、三の二ではモンシロチョウとアゲハのよう虫を飼い始めたのです。私事ですが、自宅のミカンの木でアゲハのよう虫をさがしてしていた時のこと。数匹見つけて、私が喜んでおると、

「もう、おったの。それじゃあ薬をまかにゃいかんなあ。」



鈴木　きよちか

と、家族の言葉。そんな家族も、それならとキャベツ畑からモンシロチョウのたまごや、さなぎのついた葉を持ってきてくれました。こんな時ばかりは田舎ぐらしで良かったと思います。

さて、三年生の子どもたち、本当に目を輝かせて虫たちの変化を見つめています。アゲハのよう虫が黒から緑色に変わったこと、さわると角のようなものを出して怒ったり、臭い匂いを出したりすること等、初めて見つけると喜んで報告してくれます。うっかりえさをかえずにいると、新しい葉を持ってくるまで、

「先生、もう食べる葉っぱがかれてきたよ。」

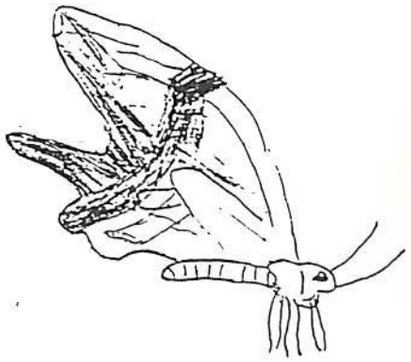
と、何人もの子に指摘されてしまいます。やさしい子ばかりです。

途中から、おたまじゃくしも仲間入りしました。最初は変化が少なく忘れられていましたが、ある日、一匹のおたまじゃくしが死んで、共食い事件が起きてから、えさや水換えを気にかけるようになりました。

ぼくたちのクラスに、おたまじゃくしがいます。そのおたまじゃくしに名前をつけました。一番小さいのは、『たまお』、一番でぶいのは『でぶごん』です。まだいっぱいいるけど、何が何だかわからなくなるので、名前をつけるのはやめました。

おたまじゃくしは、足が出てきたのもあります。はやくカエルにならないかな楽しみにしています。

（大野　こうすけ）



林　けんすけ

いよいよカエルらしくなった頃、みんなで理科ノートへも記録しました。

おたまじゃくしは口が小さかったのに、大きくなった。
それに、しっぽが短くなった。（別所　たける）

カエルが乗るようにと、水そうの中に石が入り陸地が作られました。

でも、カエルになるとえさをあたえるのが難しいので、自分でえさを取るようにと、四匹が水そうを卒業していきました。

「先生、モンシロチョウのよう虫に、小さいまゆがついとるよ。」

「ヘチマのまきひげがのびて、変なとこにまきついているよ。」

「先生、また一匹、アゲハがさなぎになりそうだよ。」

子どもたちの、「大変だよ」が続きます。これからも、子どもたちの息をはずませた、新しい発見が楽しみです。

真野　こうじ

四、うちのカレーより　おいしくできたよ

四年　担任　吉田　千鶴

「やったあ！」
「できたぞ！」
「早く、食べたいよう。」
カレーライスができ上がった時の、子供たちの歓声です。
六月二十九日（土）、待ちに待った『カレーライスを作ろう会』の日のことでした。四年生は、観察や実験のために、農園でたくさんのじゃがいもを育てました。
四月からずっと、理科の授業の時には、ノートを持って観察にいったものでした。教室の外に出ることが大好きな子供たち、喜んで農園に出かけて行きました。
六月のある日、いつものように農園に出かけて、実験のためにできたいもを掘っている時のこと、
「先生、これ食べたい。」
子供がぽつりといいました。
「よし、じゃあ、みんなで料理して食べようか。」
この時の喜びようは、観察に出かける時とは、比べ物にならないほどでした。
四年生みんなで、収穫したじゃがいもを使って、カレーライスを作ることにしま

鈴木宜代

した。玉ねぎとにんじんは子供たちが家から持ち寄ることにしました。材料が揃ったので次は係分担です。料理係、火係、食卓係に分かれました。何と言っても、料理係に人気が集中し、決めるのに苦労しました。女の子はもちろんですが、男の子の希望者も意外に多く、みんなやりたくて仕方がない様子です。結局、公平な方法ということで、あみだくじで決めることにしました。そのほかは、すんなり決まりあとは土曜日を待つばかりです。
いよいよ『カレーライスを作ろう会』がやってきました。子供たちは係に分かれ、意気ごんでそれぞれの場所へ向かいました。家庭科室に集まった料理係の子たち。先生の説明を真剣な表情で聞いていました。
「さあ、それでは、材料を切って下さい。」
初めはこわごわ包丁を握っていた子供たちも、だんだん慣れてきて、じゃがいもを切る音も軽やかになってきました。そこで、料理係最大の敵、玉ねぎの登場です。子供たちは目を真っ赤にして涙を流しながらの大奮闘でした。

みつる君が、玉ねぎを切ったら泣いてしまいました。玉ねぎを切ると、なんで知らない間に涙が出てくるのだろう。つよし君が玉ねぎを切るのを見ていたら、私やまりなちゃんまで泣いてしまいました。
（天野　めぐみ）

材料が来ないので、しびれを切らして、火係の子が家庭科室まで取りに来ました。長そで、長ズボン、軍手をはめた手にうちわを持って、みんなとてもたくましく見えました。

はじめに用意をして、まきを入れて、新聞を入れて、先生が火をつけて、なべにお湯を入れて、ふたをかぶせました。そして、うちわで火をおこしました。ぼくは、「今からやるぞ。」と思いました。
（川澄　充久）

やっと材料が全部切れて、みんなでなべのところに行きました。カレーのいいにおいが、ぷーんとしてきました。サンクガーデンには、食卓係の子がシートを敷いて、みんなが食べる場所を用意していてくれました。後はでき上がりを待つだけでした。お皿いっぱいにカレーを盛って、みんなフーフー言いながら食べていました。おかわりする子もたくさんいました。

みんなで「いただきます。」を言いました。そして、大っきらいなにんじんを食べてみました。おうちで食べるより、とてもおいしかったです。

（土上　智美）

料理係の子の涙、火係の子の汗、食卓係の子の気配り、いろいろな力が合わさって、とてもおいしいカレーができ上がりました。自分たちの力でやりとげたと言う自信が、きっと子供たちの力になるでしょう。

鈴木宜代

五、わずか四分「天地創造」の華

五年担任　森下　初子

今年の五・六年生の学習発表（運動会演技）は、「天地創造」。人類誕生の物語です。

物語は、①光と闇ーまだ何もない時期②海、陸、草木の誕生③人間の誕生④人類繁栄⑤ノアの箱船と嵐⑥エンディングーノアたちは助かり、虹が出る、という六つの場面から成っています。指揮者の小田先生を中心に、各場面ごとの分担を決めました。柴田先生と私は③の場面です。

今まで、上地の五・六年生の学習発表はとても楽しみでしたが、低学年ばかりだった私には、あくまで人ごと。見て楽しんでいるだけで、どうやって作り上げたのか、その苦労は全く知りません。自分が作る側に回って、初めて考え込んでしまいました。上地の組み立ては、一つの物語になっていること、主役の動きやナレーション、音楽の使い方、大勢での組み立てなどに目を奪われます。その中に、表現・踊りがあることも特徴の一つなのですが、どちらかと言えば地味な部分かもしれません。けれど、いろいろ話し合ううちに、表現、踊りも大切な部分だということが分かりました。例えは変かも知れませんが、組み立ての中の箸休めのようなものです。

それでも、三場面の人間の誕生を全員で表現するなんて、どうもピンときません。何回も経験している太田先生から「人間が生まれた喜びやその美しさ、華やかさが表せたらいいね。」とアドバイスしてもらいました。そこで、喜びをテンポの速い曲で、美しさをゆっくりした曲で表現することにしました。柴田先生が前半、私が後半を担当することになりました。

私の部分では、クラス全体で一つの花を表現することになりました。柔らかい軽い動きです。女の子は優しさを、男の子は、それを支える強さを表現できればと思いました。三重の円になりますが、内側の男子はおしべやめしべ、まわりの女子は花びら、一番外側の男子はがくの部分です。

踊りも三通りになるので、自分のクラスの子に先に教えました。授業後の短い時間でも、子どもたちはよく覚えました。

最初は、ドキドキして、両足を上げるところなのに、左足を上げてしまいました。でも、後の方は、まちがえることもなくできました。だから、とても安心しました。二時間練習したけど、なぜか、すぐ終わってしまったような気がしました。また練習してうまくなりたいです。また、みつ本先生や、しば田先生に教えてもらったおどりもわすれないようにしたいです。

五の二　中山　葵

ほかの場面もありますから、それほど練習時間はありません。一通り伝え終った後、全員で踊ってみました。ところが全然美しくありません。「蝶のように」と言ったのに、羽のない青虫のような有様なのです。難しいかと思った前半の曲の方が、子どもはのって踊っています。それなのに、後半はさっぱりです。小田先生も「小学生に美しい表現は難しいんじゃない。」と言います。やっぱり無理なのかなあ。自分のクラスだけの時はいいと思ったのに、大勢だからいけないのかもしれません。「まだ覚わっていないんだよ。」と満本先生が言ってくれます。もう一度練習の時間を取ってもらいました。

ぼくたちは前、先生のたのまれで花の部分をおどりました。中庭で男子のおしべの所をおどる人といっしょに練習しました。いろいろよ説明し何回もおどっては、音楽に合わせておどりました。ぼくは、とくに広段君が考えた踊りがすきです。みんなもそのおどりにのっていました。この調子で運動会までがんばってやっていきたいです。　五の二　和田卓郎

子どもの考えた動きは人気があるようです。子どもの気持ちにあっているのでしょう。すこし安心しました。中には、「このごろおどりばかりでたるいです。今ごろおどりなんかやっていて間に合うのかなあ。」と書いてくる子もいましたが、楽しみにしている子がいることも分かりました。

私は、このごろ運動会の練習がまちどおしいです。だけど、私は体育がきらいなのに、どうしてすきなのだろうと思います。やっぱり、それはおどりの練習からきているんだろうと思います。だって、私は音楽が好きだし、体を動かしたりするのが好きだからです。とくに英語のおどりが下手だけどすきです。おどりのところが二か所しかなくていやだけど、ララの動きをまちがわないようにがんばります。

五の二　牛田佳余

最初はどうなるかと思った踊りですが、練習を重ねてだいぶきれいになってきました。初めは五年生の方がのみこみも良く上手に見えたのですが、この頃は指先の動きなど六年生が際立っています。一年の違いは大きいようです。。「体もしっかりできているし、精神的なものも出るんだろうね。」と分析していますが・・・。がんばれ五年生！

組立の方が得意な子もいますし、踊りの方が好きという子もいます。紙面ではふれていませんが、他の場面でもいろいろな苦労がありました。一人ひとりの子が、それぞれの場面で自分の力を出し切ってくれることを願っています。三場面は、わずか四分。あっという間に終わってしまいますが、私たちの意図したものが伝われば、と思います。

さあ、運動会まであと五日です。

六、もう一泊したいなあ

5年担任　柴田　美香

朝、七時二十分ごろ目がさめて、もうそれから眠れなくなった。九時三十分に家を出て、友だちといっしょに学校に来た。バスに乗る前からもう、不安と楽しさでいっぱいになった。

（五の三　植村　英子）

五年生の子どもたちにとっては、一年のうちで最大の行事である二泊三日の山の学習。行く前の緒子供たちは、初めてお父さん、お母さんと離れて過ごす不安と、友達と生活する楽しみとが入り交じって、複雑な気持ちだったことでしょう。十月十五日、快晴。五年生は十時集合となっているのに、一時間も前の九時から大きなリュックサックをしょった人影がちらほら。

いよいよ少年自然の家に向かって出発です。少年自然の家につき、お弁当を食べたら、荷物を置いて入所式。三日間、友達と協力して元気いっぱい頑張ることを誓いました。

一日目は、テントでの生活です。「うまくご飯がたけるだろうか。」と、とても心配していた飯盒炊飯に入りました。

驚いたことに、どのクラスのどの班も優秀。応援に駆けつけて下さった先生方の協力もあって、ふっくらご飯と、あつあつカレーのでき上がり。おいしそうにできたカレーライスを前に「ごはんの歌」を力一ぱい歌う子どもたちの顔は、本当に嬉しそうでした。夜ご飯の片づけが終わるころ、辺りは薄暗くなり始め、次は「肝だめし」です。「いやだあ。」と言いながらも、にこにこ楽しそうな子どもたち。おばけの怖さに、泣き出してしまった子も・・・・。

歩いていると先生がすわっていました。（びくっ！）その時、こわい顔のばけが、「バァー。」とあらわれました。「キャー、ワー。」「追いかけてくる。」「にげろー」前の方からみんなの声が聞こえる。私たちはひっしで走っていった。

五の三　小島　照子

テントで寝る時間です。初めて友だと寝る楽しさに興奮している子どもたちの目はランラン、寒さも手伝ってなかなか眠れなかったようです。

田中先生の声が聞こえたので、かい中電灯のスイッチを切って自分のねる所にすばやくいって静かにしました。しばらくそのまんまにしていました。ようやく田中先生の声もしなくなり、どこかへ行ったことを確かめると、またしゃべりはじめました。こんな楽しい夜を過ごしたのは、初めてでした。

五の三　服部　哲也

二日目。眠れぬ夜のため、声はガラガラ、目はまっ赤。それでも元気よくオリエンテーリングに出発。

スタート地点に着いて落ち葉スキーを見た時、ぞくぞくした。いよいよオリエンテーリングをやる時がきた。「やるぞ。」という気持ちがわいてきた。そしてスタート前、急に緊張した。

五の三　丹下淳一郎

ロッジで夕食を食べ、いよいよ「キャンプファイヤー」の時間がやってきました。静寂の中。厳かに入場。エールマスターの田中先生と一緒に歌を歌ったりゲームをしたりするうちに、ファイヤーの火は赤々と高く燃え、雰囲気は盛り上がっていきます。ついに、スタンツ。

田中先生が「三組のみなさん。」と言いました。始まりました。みんな、声が良く出ていました。声が出なかった子がたけど、その人は動作だけで、他の人が大きな声でせりふを言ってくれました。終わった時ほっとしました。

五の三　川口　久美

最後の日。使わせて頂いたロッジをきれいにそうじして退所式。

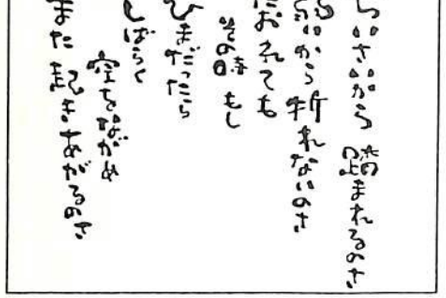
「もう一泊したいなあ。」と言うつぶやき。

五年生一七五人の胸にすばらしい思い出を残した山の学習は終わり、名残惜しそうな子どもたちを乗せたバスは、上地小学校へ帰ってきました。本当に楽しかったね。

七、かぎりなくやさしい日々のために

―読書指導を通して―

六年担任　満本妙子



だれも気づかず、だれも見向きもしない、そんな小さな名もない草花でも、強く、たくましく生きている。そんな道端に咲いている野の草に目をとめ、その美しさに感動して、その想いを花や詩で書きつづった星野富弘氏。

「かぎりなくやさしい花々」の作者星野氏と六年四組の子どもたちとの出会いは、このハハコグサの詩を味わうことから始まりました。

読書の秋に、そして六年生としてあわただしく過ぎていく毎日に、少しでも心のゆとりを持つことができ、また、子どもたちの心に残る本にふれさせたい、そんな思いで選んだ本が、この「かぎりなくやさしい花々」でした。

体育の教師でありながら、体の自由を失うという失意の底にあった作者が肉体のハンディを乗り越え、明るく、力強く生きる姿を描いたこの本は、読む者に感動を与え、教えられることがたくさんありました。しかし、その星野氏が何の苦しみも悩みもなく、今の星野氏にたどり着いたのでしょうか。そんな疑問を胸に、子どもたちとこの本を読み進めていくことにしました。

毎日、二十分間読書の時間を取り、それが終わるたびに、短い感想も書き加えることにしました。静まり返った教室で、「かぎりなくやさしい花々」の読み聞かせに真剣に聞き入る子どもたち。この時間は、忙しさに追われる私たちに、何か安らぎを与えてくれるようなそんな時間でもありました。

突然の事故で、不自由な体をしいられ、長い病院生活を送らなければならなくなったという初めの書き出しのところでは、

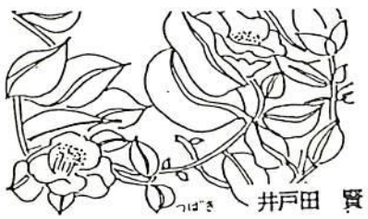
「かわいそうである。」というような同情的な感想が多く、この本を表面的な見方で終わってしまうのではないかという心配がありました。しかし、日を追い、読み深めていくうちに、子どもたちの感想も少しずつ変わってきました。

星野氏自身が、自分の弱さや心の貧しさに気づき、悩み苦しんだ日々があったことから、子どもたちは、今まで「偉い人」とか「すごい人」と単に美化して見てきた作者の本当の心の傷みを知ることもできました。

自分の大切な体が動けなくなり、自分の悪いところが見えてきて、本当の心も弱い所も見えてきて・・・。星野さんは、今までの「自分」のことをよくわかってしまったと思う。今、何もごまかすことができずに本当の自分だけで生きている。私は、「星野さんて強い人だなあ。」と思っていたけど、本当は、みんなと同じ弱い一人の人間で、いいことばかりを考えているわけでもなく、特別な心を持っているわけでもなかった。毎日、毎日自分がわかり弱いとわかり、そんな生活は、とてもつらいと思う。

（竹原　牧恵）

また、「体の不自由な人は、本当にかわいそうなんだろうか・・・。もし、かわいそうだとすれば「かわいそうだ」と特別な目で見られながら生活しなければならないことのほうが『かわいそう』なのではないだろうか。」という作者自身のことばは障害者の気持ちを素直に表したものであり、私を含めて、子どもたちに障害者に対する考え方を改めさせるものでもありました。　文字が書け、絵が描けるという当然であるべきことが当然でなくなった時、でも、そのことによって作者は、文字のすばらしさやそれをつづれることの喜び、そして、絵が描けることのすばらしさを知りました。私たちが、毎日の生活の中で見落としてしまっている一つ一つのできごとに心をとめ、平凡な日々がどんなに大切であるか、そして、生きることがどんなにすばらしいことであるかも教えてくれたような気がします。



井戸田　賢

最後の授業では、以前にＮＨＫで放送されたＶＴＲを視聴しましたが画面に現れた星野氏を見て、「すごく穏やかで優しい人なんだなあ。本当に苦しくつらいことをたくさん乗り越えてきて私たちを静かに見守っているような気がした。」とか、星野氏と奥さんの絵を描く場面に「かなしばりにあったようにじっと見ていた。星野さんと渡辺さんは、とてもいいコンビで、心がじーんとしてしまった。」というような感想を持ってくれた子もいました。

作者を身近に感じ、作者の心を察し、気遣う感想が増え、この作品にひきつけられていることがわかるようでした。

私が一番強く覚えているのは、その花の絵のこと、命の尊さです。一筆一筆心を込めて書いた花の絵から感じることはいろいろあると思います。星野さんは、最初生きる気はなかったけれど、今はきっと、希望にあふれ命のすばらしさを知った美しい心で毎日を過ごしていると思います。私もこの本を読んでいくうちに、星野さんといっしょに、命の輝きを知りました。これからも星野さんは、毎日を大切に過ごしていくと思うけど、私も一日一日を大切に、いい思い出にしていきたいと思いました。

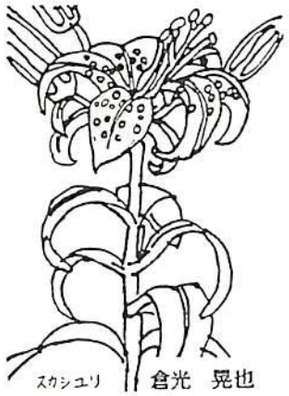
（岡田　さやか）

海藤　健児

九年間の間に、星野さんは、学校でもスポーツでも本でも教わらなかった人間の心というものをはだで感じ取ることができて、星野さんにとって大きなプラスになったと思う。病院では、看護婦さんや先生、それにけがをして入院してきた人などいろいろな人に会って「人間の心の温かさ」というものに気づかされた星野さん。そして、本当の友情を持った友達が、また自分にいたこともうれしさの一つだった。だから、私も本当のことを言い合える友情を持った友達と、あら井さんのように、何でも言い合える本当の友情を持った子になりたい。（鈴木由香里）

この二週間ほどの読み聞かせを通して、作者の生きる姿から、粘り強くがんばることの大切さ、生命の尊さ、生きることのすばらしさを子どもたちなりに感じてくれたと思います。また、そんな星野氏を取り巻く人々の思いを知り、温かい人間の心限りない愛情にふれることもできました。

読み聞かせの時間を楽しみにし、「かぎりなくやさしい花々」の読書が終わることにさみしさを感じる子どもたち。短いひとときでしたが、子どもたちとともに、とても充実した時間がもてたように思います。一冊の本を読んだからといって、私たちの生活に何か形として表れてくるものではないかもしれません。しかし、この一冊の本が基になり、子どもたちの心の片隅に何かを残してくれたような気がします。これからの長い人生の中で、この本との出会いを思い出すことがあってくれたら・・・。そんな気持ちでいっぱいです。



スカシユリ　倉光　晃也

八、おかあさんはいそがしいね

―うちのひとのしごと―

授業参観の日など、お母さんが来なくて、そわそわする子ども、お母さんを見つけて手をふる子ども・・・。家族に対する子どもの思いはとても強いものがあります。でも、自分が学校に行っている間に、家族がどんな仕事をしているか答えられなかったり、お父さんの仕事は、「会社」と答たりする子もいます。

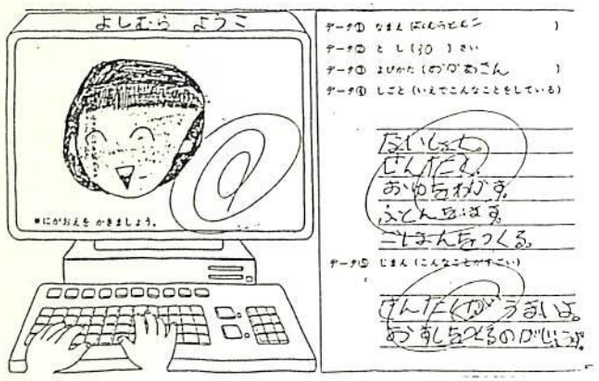
そこで、家族のインタビューやお手伝いを通して、自分が家族にいかに支えられているか、わからせたいと考えました。

① わたしの家族を紹介しよう。

はじめに、自分のことを紹介しようということで、自慢を発表し合いました。「なわとびが得意です。」「ドッジボールが得意です。」など友だちの得意なことがよくわかりました。

次は、家族の紹介です。家庭学習で家族の家での仕事や自慢を調べてきて発表しました。

・お父さんの仕事ー・冷蔵庫をきれいにしている。
・お父さんの自慢ー・泳ぐのがとてもうまい。
・お母さんの自慢ー・仕事から帰っても必ずそうじをする。



一年　担任　高田　加代子

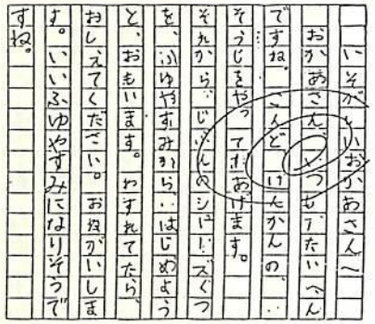
・お母さんのハンバーグは、お店のよりおいしいよ。

家族の家での仕事を黒板にまとめていくと「お母さんの仕事が多いなあ。」というつぶやきがありました。実際に、家族がどんなふうに仕事をしているかについては、知らない子どもが多かったので、「かいもの」「あとかたづけ」「せんたく」の仕事について家庭学習で調べることにしました。

かいもの 安くておいしくて新鮮なものを選んで買っている様子が、買い物についていってよくわかったようです。また、「ぼくたちが喜ぶものを作ってくれるよ。」「お父さんの好きな刺身を買っているよ。」と家族のことを考えてメニューを決めているお母さんの気持ちも知りました。そして、「レタスを買う時、虫食いのを選んでいたよ。ぼくが聞いたら『虫が食べるくらいおいしいよ。』と教えてくれました。」・・教師も子どもたちも感心するばかりでした。

あとかたづけ 油で汚れたお皿をどうしているか興味が集まりました。「お湯で洗うと油がよく落ちるよ。」「油のついた皿は、紙で拭いてから洗っていた。」などお母さんたちの苦労や工夫を見つけてきたようです。中には、「お茶わんを洗剤で洗うと、その水はどこへ流れていくのかな。」と汚れた水の行く先を心配している子どももたくさんいました。「川や海に流れていくよ。」と答えるとみんなとてもびっくりしたようです。

せんたく 一週間を通してせんたくをしたかどうか調べたので、毎日々せんたくをしているお母さんの姿をとらえることができました。「多い時には一日に五回もせんたくしたよ。」の発表には、よごし屋さんたちはどんなことを思ったのでしょうか。



つじむらみなこ

がんばれ　一年生

この学習は、家族の人へのインタビューや家事の体験など家庭の協力を得ながら行いました。本当に感謝しています。

子どもたちは、くつ洗いをするようになったり、ふろ洗いをしたり自分でできそうなお手伝いに挑戦しています。

楽しい冬休みには、家族の人と相談しながら、自分のできるお手伝いをもっともっとがんばるそうです。

② お手伝いをしよう

自分がおうちで手伝っている様子を聞いてみると「どぶそうじをします。」「ふとんをほします。」などが発表されました。

一の三のお手伝いベスト5は次のようです。

1．食器はこび　2．食器のあと片づけ　3．新聞とり　4．食器洗い　5．カーテンしめ

「自分ができるお手伝いは、どんなことだろう。」と持ちかけると「げんかんそうじ」「ふろそうじ」等いろいろでました。子どもたちは、この学習を通して、お母さんは大変忙しいということが実感できたと思います。

九、「おれはチョーローー」の話を劇に

二年担任　守山妙子

～全て子供たちの手で～

暗い中、幕に鶏の影絵が映し出されます。そして、

「コケコッコー、コケコッコー。」

「おれは、チョーロー。」

と、三十四名の子供たちの声が響きます。すると、曲が流れ、幕が開きます。

二年一組が、学芸会で行う「おれは　チョーロー」の朗読劇の始まりです。

映写、効果音、照明、幕、全てが子供たちの手で進められていきます。

ですから、担任の私は、舞台全体をじっくり見ることができます。

終わりに歌を歌い、幕が閉じた後、子供たちは私の口が開くのを待っています。

「鶏の声が、そろって出たね。」

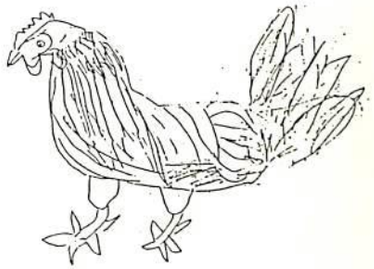
と、先ず、良いところを褒めます。そして、次に、直したいところを教えます。

「話しながら、すわらないようにしよう。話し終わってから、ゆっくりすわればいいんだよ。」

「動きっぱなしでなく、止まるところを作って、また動き出すんだよ。」

真剣に聞く子供たちの姿に、もっともっと良い面を引き出すことができたらという思いで、さらに話し続けます。

二年生の子供たちでも、やる気でやれば、舞台の上の演技だけでなく、裏方の役目もきちんと果たしてくれます。



2年　伊世　祐子

ぼくは、テープの係と二回しゃべるところがあります。体育館の放送室に行ってから、だんだんどきどきしてきました。ぼくは、ぜんぜん落ち着けませんでした。放送室から舞台へ出たら、

「声には　自信があるから。」

と、言います。そして、また、放送室へもどってテープの係をやります。

だんだん落ち着いてきた時には、もう劇は終わっていました。

ぼくは、やってよかったと思います。

（高市　裕文）

わたしは、いちばん最初のチョーローなので、舞台の真ん中にいます。「おれは、朝四時前に目が覚める。」で、起きてはねをばたばたします。しゃべる場がない時は、みんなの言葉に合わせて動作をしています。

「ふん、おもしろくない。」

と、言うと、わたしのチョーローの場面が終わります。

次からは、わたしは放送室にいます。暗くするところで、ものさしを下にやってばっと上げます。それから放送室を出て、そうとそうと階段を下りるので、最後の「それにしても」のところに来てしまいそうです。ぎりぎりのところで、歌を歌うことができます。

ほっとして、歌います。

（白井　陽子）

確かに、舞台での演技と裏方の役を掛け持ちすることは、大変です。でも、子供たちは、「家の人に見てもらうんだ」と、張り切って練習を続けていました。

～二年一組の子供たちとチョーロー～

九月二十一日の読書タイムに、嶋田稔校長作「おれは　チョーロー」の話の読み聞かせをしました。すると、子供たちは、「おもしろい」と、すぐに反応を示しました。読み終わると、「もう一回読んでほしい」と言う子もいました。

これは、教室のそばの上地牧場にいる雄鶏・「チョーロー」が主人公で、子供たちにとって関わりが深いのです。内容に出てくる「靴を落とす」「糞をする」という場面には、実際に出会っているのです。

九月から十月にかけては、図工の時間を利用して、

・好きな場面の絵を描く（校門の前に捨てられた・チャボが遊んでいる・子供が登校してきた・靴を落とす・子供に捕まえられて糞をした場面）

・絵本作り（好きな場面絵を選び、印刷し製本）

・お面作り（チョーロー）をしました。

十一月、作った絵本を読み、作り上げた時の苦労を話し合いました。絵本を家に持ち帰り、家の人にも読んでいただきました。

「お母さんが、『上手にできたよ』と、言ってくれたよ」と、嬉しそうに話してくれました。

そして、体育の時間には、「チョーローになってうごこう」というめあてで「おれはチョーロー」の話をもとに、表現の学習をしました。

えさを食べる場面、靴を落とす場面、糞をする場面を全身で表現します。

このように、いろいろな場で「チョーロー」を取り上げ学習してきました。

そんな中で、子供たちから、

「このお面で、学芸会もやるのかな？」

「せっかく作ったから、やりたいな。」

「やろう、やろう。」という声が上がりました。

二月二日の学芸会には、張り切って上演して、みんな満足そうでした。

2年　天野　奈津希

十、やればできるんだよ　～ながなわ大会に向けて～

三年担任　西田　貴子

「一、二、三、四、五、…」

運動場やサンクガーデンのあちこちから、子どもたちや先生のかけ声が響きわたってくるようになった。今年もながなわ大会が始まりました。

「三年生のながなわ大会はいつからなの。」

「体育の授業でながなわの練習をしようよ。」

学校で行事があるたびに、意欲をわかせ、頑張ろうとする三の四の子どもたちなので、（ああ、今回のながなわ大会も、一生懸命頑張ろうと思ってくれているんだな。）と考え、頼もしい気持ちでいっぱいでした。

三年生のながなわ大会は、三月二日から一週間の予定でした。二学期にも学年集会でながなわの競争をしていたのですが、なかなか思うようにはいかず、くやしい思いをした覚えがあったので、授業中に、少し練習をしようと考えていました。

ところが、私と子どもたちの気持ちが一緒ではなかったようでした。

「もう、やめようよ。つかれる。」

子どもたちの気持ちが、ながなわに集中していませんでした。何度も同じ失

望月　愛

敗ばかり繰り返し、それを何とか直してみようという気合いすら感じられませんでした。（ああ、やりたくなかったんだ。）と思い、私のながなわへ意欲が薄れていくと同時に、悲しみの感情がこらえられなくなってしまいました。

> ながなわでとべた数が、だんだん少なくなってきました。教室の黒板に、『先生の気持ちがみんなにつたわらなくて、とてもざんねんです』と書いてありました。私は、黒板をみて、なきそうになりました。　（鈴木　紅里）

子どもの前で、本音を言いながら、ボロボロと泣く私。もう、ながなわ大会は参加しなくても当然のつもりでした。先生の言葉に我慢ができずに、ボロボロと涙を流し始める子ももいて、クラスは最悪のムードでした。

「もう一度、ながなわをやるチャンスを下さい。」

「今度はぜったいみんなでがんばって、いい記録を出します。」

まさか、こんな言葉が、子どもたちからとび出してくるとは思いませんでした。涙をこらえながら、口々に自分の気持ちを伝えようとする姿に、私は、またもや涙顔になりそうでした。

「行っておいで。頑張っておいで。」

（うれしい。子どもたちが、自分たちの力で、やる気を出してくれた！！）

数をかぞえる大きな声が、職員室にまで響いてきました。どのクラスにも負けないくらいの気迫でした。なわを回す人や、とぶ順番を工夫する姿も、今までの三の四には見られないことでした。

見ていることに我慢が出来なくなった私は、なわを回し始めました。子どもも先生も真剣でした。

とんでいる時に、横を見たら、重たいなわをいっしょうけんめい回している蓉子さんが大へんそうにみえました。だからもっとがんばりました。

（赤堀　加奈）

ついに、二九九回まできました。みんなの声がはずんでいます。うれしい気持ちがいっぱいではち切れそうです。

（下河内　清夏）

「二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、…やったあ！」

今までの最高記録でした。これ以上の盛り上がりがないくらいの喜びでした。

ながなわ大会一日目、七〇一回。やれば出来るのです。この調子で頑張って欲しいと思います。

三〇二回とんだとき、私も泣きそうになりました。みんなで力を合わせればとべるんだなあと思いました。これからも、みんなで力を合わせて、千も万もとんで、上地小学校の中で一番になりたいです。

（佐野　恵子）

四、学校ニュース